

セブン・ホワイト・ナイツ

王子の犬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこにでもいるような中学生だった、織斑千冬。

或る日、友人の東が海外の最優秀科学賞を獲得した。

一緒に白騎士を作ろうと誘われ、なんとなく付き合いでIS開発に関わっていく
……。

※その昔、『七機の白』という題名で匿名投稿していて、何らかの理由で書くのを中断
し削除した作品です。

ずっとデータを紛失したと思っていましたが、このたび発見したので、誤字等修正し

たものを公開します。

十六話で打ち止め、未完となります。

目

次

*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
1	9	8	7	6	5	4	3	2	1
0									
68	61	54	47	40	33	25	15	10	1

一〇日、何者かが、全国の小中学校、病院のサーバーに侵入した。

——女子児童・女子生徒の健康診断結果、特に身体情報などを記したファイルを持ち去つた——という報道が全国を駆け巡つた。

「怖いなあ……うちの中学校もやられたのかな」

千冬は読んでいた地方新聞を脇に伏せ、ご飯をかきこんでいる束に向かつてつぶやいた。

どこかの変態がリストを見ながら妄想に浸り、よからぬ事を企てる輩に売り払う。

(他人の秘密を売りさばいて、金儲けをする連中がいるとか……)

知らないところで情報が切り売りされていると思うと、むしろそのことで恐れを抱いた。

千冬は、毎朝早く幼い篠たちに助けられながら、篠ノ之神社の境内を掃除するのが日

課になつていた。もちろん、勤労奉仕の精神があるわけでもなく、神主が少額ながら小遣いをくれるからだ。

掃除のついでにクヌギの灰褐色の樹皮を拾い集める。知り合いの染織家の元に持つていくとお駄賀になつた。

境内裏の雑木林にはクヌギはもちろん、コナラ、ケヤキが間伐せぬまま雑然と並んでいる。管理者である篠ノ之姉妹の父は「わびさび」を懸命に主張して、ずっと間伐の手間を惜しんでいる。

奥の石碑の傍らで神性を感じた。

パワースポットとして地方のPR紙に載つたことがある場所だ。

紹介される以前から、千冬は常緑樹の濃い緑に包まれた空間にやすらぎを覚えていた。

中学校は、神社が建立された山を下りてすぐの場所だ。眠たそうな顔つきの東を引きずつて、教室へ向かう。

全校集会で個人情報漏洩の件に触れるかと思いきや、そんなことはまつたくなかつた。

授業は通常どおり行われた。

十一日になると、東が突如として職員室へ呼び出された。

本拠地を英國に置く、有名な科学雑誌に論文が掲載され、どうやら激しい論争を巻き起こしているらしい。

最高の賞を授与されるらしく、教職員たちが騒然となつた。

十二日、朝。

急ぎよ全校集会が催された。

壇上に立つた校長が間延びした声で発表する。

「本校の生徒である篠ノ之東さんが、英國の出版社が主催する科学賞で最優秀賞を獲りました」

インフィニット・ストラトス・コア理論。

画期的な長距離量子通信を実現し、ジョウント、思念によつて別の場所への瞬間転移を可能にするという。

東は壇上に立ち、全校生徒の前で舌つ足らずな口調で理論を説明した。

語り終えて、グルリと眼下を見渡し、大人を含めて誰ひとり理解していないことを確かめた。

教室に戻るや、遠巻きではあつたが、同級生たちから賛辞を浴びる姿を目撃した。

その後、千冬の傍らまで寄つてから耳打ちした。

「ちーちゃん。一緒に世界を変革しようね」

千冬は、びっくりしてしまった。

視線を右往左往させ、モゴモゴとあいまいな返答をする。

束のあまりにも真剣な眼差し。

圧倒されてしまい、ゆっくりとだが、首を縦に振つてしまつた。

それを見た束は、満足そうに自席へと踵を返した。

(さつきのはどういう意味だつたんだろう……)

千冬は友人の背中を見送つて、そんなことを考える。

一三日になり、イギリスから束宛てに小包が届く。

一緒に開梱しよう、と誘われたので、千冬が彼女の部屋を訪れる。

雑然としていた部屋が整理整頓されていて、様々な道具の置き場が明示されていることに驚いてしまつた。

小包の差出人は英國オルコット社だつた。

封入された書面には、ジエームズ・オルコットCEOの署名がある。

千冬は「CEO」の意味がわからず、束に確かめる。

「最高経営責任者、だよ。ちーちゃんはバカだなあ」

空が赤らみ、窓から夕陽が差しこんでいた。

裏の雑木林からヒグラシが鳴いている。

窓を閉めてもなお、蝉の声が頭の中に響いてきた。

束が包みを開梱する。

ビニール袋入りの薄膜シートが一二枚。どれも厳重に梱包されていた。

「ペラペラじゃないか」

千冬が薄膜を夕陽にかざす。透明のシートに毛細血管のような筋が浮かび上がった。そして束から金額を聞かされ、真っ青になつて袋へと戻した。

十四日、午前十一時。

千冬は束に呼び出され、指定の場所まで必死に自転車を漕いだ。

汗だくになりながらたどり着くと、あたりには田園風景が広がっている。束はリュックサックから小さなビニール袋を取りだす。

「ちーちゃん。このシートをカッターで切つてみてよ」

千冬は言われるがままシートに切り込みを入れた。

「……」んな感じか？」

「いーねえ！」

受け取った束は、用意していたゴム動力プロペラ機にシートを貼り付ける。プロペラ機を風上に向けて飛ばす。

機体は長いあいだ飛び続けた。ずううーと飛び続けている。

「……やつちやつた？」

束のクラフト飛行機(ゴム動力プロペラ機)はとてもよくできていたのだ。

竹籤(たけひご)を火であぶつて作つたとは思えない飛行距離だ。

白い入道雲がひとつ、ぽつかり浮かんでいる。

清流のにおいがした。

蝉の声を聞きながら、ふたりは静まりかえつて途方に暮れた。

「どうするんだ。束、いつちやつたぞ！ もう見えなくなつちやつたぞ！」

「……どうしようか」

束は持参したノートをクリップボードに広げて留めた。

関数電卓を叩いて落下地点を計算するつもりだ。

十二個しかない貴重なISコアを紛失したとあつては、全世界の科学者が激怒するに違いない。

束は懸命に計算し続けている。

千冬は手持ち無沙汰だつた。

(東のやつ。どうしてシートに傷を付けさせたんだろう……)

理由を考えてみたが、……何も思い浮かばない。

だいたい、東が口にするジョウントの意味すら理解していないのだ。

「あああーーだあーめーだーー！ データが足んないーー！」

東が大声を叫んで関数電卓を頭上に掲げ、叫んでいる。

半狂乱になつた東をなだめながら、陽が暮れる前に、ふたりで家に帰つた。

一五日。

昨日訪れた水田の方角からすさまじい爆発音が生じた。

テレビ・新聞などの報道機関、警察、消防、自衛隊、役所……ご近所さんがしきりにうわさしあう。

窓から音の方角を呆然として眺めていると、家の電話が鳴つた。

東だ。

彼女は小声でまくし立てた。

「ちーちゃん。ちーちゃん。昨日のＩＳコアが爆発しちやつた！」

千冬は自転車を引っ張りだし、爆発現場に向かつた。

現場へ続く県道は警察が封鎖し、バスを改造したと思われる機動隊の特殊車両が通りすぎていった。

どうやら爆発物処理班が動いているようだ。

千冬は警官にとがめられ、引き返すほかなかつた。

数日が経過していた。

終業式の帰り路。自転車を押していた束が話しかけてきた。

「ちーちゃん。現場に行つてみよつか。例の」

「……そつちがそういうなら……」

シートを探そうにも、おそらく爆発で消滅していく回収できないだろう。
一部が残っていたとしても探しあてるのは、まず不可能だ。

『爆発が自分のせいではないか』と、千冬は毎晩思い悩んできたこともあって、真っ先に束の考えに賛同した。

(な、なんだ!?)

現場は立ち入り禁止。

仕方なく迂回し、三〇分ほど登山してから、水田を双眼鏡で睥睨する。

述べ十ヘクタールの水田、おおよそ一キロメートル四方が吹き飛んでいた。

一応、地中の不発弾が起爆した、と報道されている。

千冬は驚いて腰を抜かしてしまった。

束は、ビルを一瞬で消し飛ばすような爆弾を作つてしまつたのではないか。

(コアに切り込みを入れたのは自分だ……)

千冬は共犯にされたのである。

事実を認めてしまつた途端、膝が笑つてしまつて動けなかつた。

やつとのことで帰宅したあとも胃が緊張して、食べ物が喉を通らなかつた。

その日は目が冴えて寝付けず、ずっと竹刀を降り続けた。

頭上で、無数の星が絶えず瞬いていた。

＊＊＊2

関内駅で降車したのは、篠ノ之神社の神主に連れられて野球の試合を観に行つて以来
だ。

千冬の地元よりも発展している。関内は関東大震災以前から銀行が集中するほどの
ビジネス街でもあるのだ。

束はスマートフォンを駆使して目的地までの地図をダウンロードする。科学賞の副
賞としてもらつたそうだ。

スマートフォンを操つていた束は、千冬の視線に気付くなり、自慢げな表情になつた。
「これが欲しくて投稿したんだ！」

束は横浜スタジアムの入場口前でしばらく待つように言う。
誰かに電話をかけていたらしく、数分して戻ってきた。

「もう少ししたら……待ち人来たる、つてね」
千冬はぽかんと口を開けた。

てつきり伊勢佐木町へ遊びにいくとばかり思っていたからだ。 束はスマートフォンにモバイルバッテリーを接続し、キャラクターもののゲームに興じる。

「なになに……」

どうやら恋愛^{乙女}_{ゲー}AD_Vのようだ。

主人公の名前は一夏。千冬の弟と同じ名前だつた。

攻略対象の男子は篠原^{しのはら}昂^{すばる}、セシル・オルコット、シャルル・デュノア、ラウル・ボーデヴィイッヒ、皿屋敷兄弟、など。

「趣味じやないな」と言つた途端束に睨まれる。

千冬はわざとらしく首をすくめ、画面から目を離した。

三〇分が経過した。

束がそわそわし始める。

頻繁に指を動かしてショートメールを交わすうちに、その人物は現れた。

「シノノノ・タバネ、さんでしようか」

束が嬉しそうに手をたたいた。

「そうです。ベンネーム、まゆんまゆんさんですね」

高校生だろうか。

千冬と背格好がよく似ていて少し大人びた顔つきだ。

大きな旅行カバンを携えており、駅へ向かう途中のように思えた。

「ペ、ペンネーム。ここで言わないで。……恥ずかしいです」

彼女は本名を名乗つた。生瀬真裕
なませまゆ

まゆまゆだと安易なので「ん」を加えたと説明した。なるほど胸元バストがたゆんたゆんしている。

「では、まゆんまゆんさん。この書類に自筆でお名前とハンコをお願いします」

束は一通のコピー用紙をクリップボードに留めたまま差し出す。

生瀬は用紙を見てたじろいでいた。ひどく思いつめた様子で、ボールペンを握る手が震えている。

「…………できました」

束が大事そうに用紙を収納する。

千冬は生瀬の覚悟を決めた表情を見て、掛ける言葉を失つてしまつた。
生瀬と別れ、渋谷まで移動した。

ハチ公口前で黄色のキャリーケースを引いた少女が現れた。

「ペンネーム、とみー、さんですね」

彼女は富山透とみやまとおると名乗つた。

髪を束ねて眼鏡をかけており、知的な顔つきだ。

背格好が千冬とよく似ている。

中学三年生。千冬たちと同級生だ。束は関内で生瀬が書いたものと同じ書類を差し出した。

やはり彼女も思い詰めた様子でサインする。

束は書類を丁重に扱つて収納した。

そして篠ノ之神社の最寄り駅を記載したプリントを手渡す。

富山はしばらくプリントを見つめたあと、キャリーケースの把手を握りしめて改札の奥へ消えていった。

「今度は羽田空港に行くよ」

「まだ移動？ やだなあ」

「ちーちゃんのほうが体力あるのに我慢がないね。心配しないで。今日はこれで最後だよ」

文句を垂れながら羽田空港国内線ターミナル駅で降車する。

待合ロビーで青色のキャリーケースを持った女性を出迎える。

「ベンネーム、みゅーたんと、さんですね」

少女は加藤深冬みふゆと名乗つた。

はるばる北海道旭川から来た。色白で彼女も背格好が千冬とよく似ている。

「では、この書類を読んでサインしてください。あとハンコを持参しているなら押してください」

加藤は束の表情を凝視する。

やはり手が震えており、もう片方の手で慄えを抑えようとしたのだが、どうにもうまくいかない。

(三人が三人とも思い詰めた顔つきだ。何かあるのかな……)

千冬は書類をしまう束の背中と、加藤の横顔を交互に眺めた。

「今から家に帰ります。一緒に来ますか」

束が言つた。

しばらくして、はい、という答えが返ってきた。

*** 3

束に交通費と食費を出すからと言われ、翌日も電車で遠出した。

上野駅では福島県から来た伊佐敷という少女と会い、蘇我駅では加賀という少女と会つて昨日と同じことをした。

蘇我から東京駅に戻つて新幹線に乗車し、新横浜駅までショートカット。

新横浜でも千冬と似た背格好の島津という少女と落ち合い、もれなく全員に篠ノ之神社までの道のりを記したプリントを渡した。

六名の少女——生瀬、富山、加藤、伊佐敷、加賀、島津——が一同に会したのはそれから二日後のことだった。

毎年夏休みのあいだ篠ノ之神社の敷地内でサマー・スクールが開催している。

束が集めた六人はその参加者だった。

六人は挨拶をすませたあとそれぞれ小包を受け取り、束の案内で離れへ向かつた。

束がいつも工作場代わりに使つている物置だが、千冬が顔を出したときよりも、さら

に様相が変わっている。

束以外の全員があっけにとられて、それを眺める。

アニメに出てきそうな白いパワードスーツが鎮座していた。

束は薄膜入りのビニール袋をスーツ表面に養生テープで貼り付けている。

そして用意していた筆記具とノート、関数電卓を配った。

「私も?」

「当然だよ。ここがどこだと思つてる?」

「物置」

「サマー・スクールだよ」

千冬はほかの六人の見わたした。

挨拶を交わした以外に特に何もしていない。

だいたい話す内容がぴんと来ない。

束は何を教えるつもりなのか、まったく何も聞いていなかつた。

「えー、もちろん科学に決まってるじゃないか。数学とか物理とか。もちろんパソコン

も使うよ?」

生瀬や富山といった連中が深くうなづく。

千冬は壁にもたれて腕を組み、むつりと黙りこんだ。

数学とか理科は嫌いなんだ、という顔。

束が棚に積んであつたチラシを取りだす。

「数学・理科（総合・物理）の特別コース。あと冊子も。

前にちーちゃんにも渡したんだけどなあ……」

両方ともすぐにゴミ箱へ投げ込んだ。燃えるゴミに出して忘却の彼方だ。

束の顔に失望の色が広がつた。

肝心の千冬が一番頭がわるい。どうしたものかと額に手をあてる。

思い直して、インフィニット・ストラatosの前で向き直つた。

「みんな。予習はしてきたかな」

六人が即座にうなずく。千冬だけが目を右往左往させている。

「とりええずちーちゃんは暗記するところから始めてよ。ジョウントのアイデイアはS F 小説から拝借したんだけど、名作だから気に入ると思うよ」

予備の冊子と文庫本を押しつけられる。

「いらないくつて……」

千冬の抗議はことごとく無視された。

蝉の声が轟く夏の一日。

千冬は束とサマー・スクール特別コース参加者の監視下で必死に分厚い冊子を繰り返

し読み、これまた興味のないSF小説を読みすすめ、何度も夢うつつの境をさまよう。インフィニット・ストラトス・コア理論。

理論をもとに作製したパワード・スーツ。

しかも作りかけのスーツがあと七つあり、東自身もパワード・スーツを着るつもりだつた。

サマー・スクール七日目。

千冬は不平不満を零しながら関数電卓を叩いていた。

ほかの六人はパソコンのキーボードをたたき、表計算ソフトや数値計算用の言語なるものを駆使してひたすら最適解を求めていた。

六人のなかでは富山と生瀬が頭ひとつ抜き出ている。東が出す課題を難なくこなしていくのだ。

最下位は加藤。少し話したところ、成績は千冬と似たり寄つたりだ。しかし、東にしつこく食い下がり、理解するまで何度もトライする。絶対にものにするぞ、という意気込みを感じた。

もともと千冬には負けず嫌いなところがあつて、東に馬鹿にされるのだけは許せない。

「ちーちゃんはばかだなあ」

束は知つてかさらずか、ことあることにのほほんと口にする。

何度も力チンと来たが、がんばつて課題に向かつた。

だが、日が経つにつれ、ひとり、またひとりと物置から姿を消していく。

彼女たちは次の段階に進んでいたのだ。

千冬が物置部屋以外の場所へ通されたのは、八月一五日の正午である。

「これと同じパワード・スーツがいくつもあるんだな」

束に確かめる。

「そうだよ。パワード・スーツじゃなくてインフィニット・ストラトスって呼んでほしいな」

束は、ほかの六人を眺めた。

コアを組み込んだインフィニット・ストラトス。重力に反して浮かんでいた。

「このインフィニット・ストラトスだっけか。ちょっと長いんだよなあ。何て呼べばいい？」

千冬が訊ねた。

「白騎士かな。

ヨーロッパに黒騎士つてのがいたし、囲碁だと白と黒で対になるつてあたりから名前

が浮かんだんだ」

「へえ……と感心してから、急に声のトーンを落として束に耳打ちした。

「爆発しないだろうな」

「大丈夫だよ」

即答に喜ぶべきなのだろうか。

訝しむ千冬を見て、束が言葉を継ぐ。

「このインフィニット・ストラトスは周囲にエネルギー・フィールドを広げることができ
るんだ。超高密度の薄い層がいくつも重なつていてコアを保護するんだよ」

「薄い層つてことは攻撃されたら、簡単に傷がつくんだろうな」

「そりやあね。でも、ちよつとした熱量なら蚊がさされたぐらいにしか思わないよ。
だつてすぐ修復するんだもの」

千冬はA4の説明書を読み、パワード・スーツを身に着ける。

手順・手順・手順……と、小声で唱えてその通りにしてみた。
束に脅させていたからだ。

『着地に失敗すると死んじやうんだよね。

これホント。

説明書が必要な人ほど説明を読まないし聞かないんだ。

だから、ち一ちゃんが特に心配』

実際、ほかの六人は志願して来ただけあつて、決して横着をしない。
千冬はいたたまれぬ思いになつた。

「私ばっかり、頭が悪いって。そりやあ、わかつてたことだけどさ」

その夜、こつそり物置に忍び込み、段ボール箱へ無造作に放り込まれていたISコアをポケットにしまう。

一晩借りて返すつもりでいたが、一步が踏み出せず、陽が暮れてしまつた。

束は爆発するような危険物だとわかっているくせに、ISコアを無造作に扱う。
二日ほど経つてからようやくコアの数が足りないことに気づいた。
すぐさま、千冬やほかの六人を離れに召集する。

「何度も数えたんだけど……ISコアが一〇個しかないんだ。
どうしてかな？」

一二個輸入して、一個は爆発して消滅した。

七個はパワード・スーツに組み込んだ。

計算上、段ボール箱には四個残っているはずなのだ。

束は段ボール箱をひつくり返す。コアが入ったビニール袋は三つしかなかつた。

(やばい……どうしよう……)

素直にポケットから出せば許してくれるのではないか。

千冬はこつそりポケットに手を差し入れる。

束はそうした心の動きを見透かしたかのように、千冬の前で足を止めた。

千冬は観念してポケットから手を出す。しかし……出てこなかつた。

「あれっ、あれっ……」

裏返しても、ほかの場所を探しても、見つからなかつた。

「……ちーちゃんには失望しちやつたな……。

もうしませんつて念書を書いてもらわなきやね。

それと、これから出す条件がクリアできなかつたら……ちーちゃんは一生私の元でただ働きだよ。食事くらいは出したげるけどね』

六人の突き刺すような視線をこらえながら、念書を書く。

千冬はISコア一個分の負債を抱えてしまつたことになる。

周辺の雑木林から蝉が泣き続けている。

負債・借金という実感が、時間が経つごとに胸にしみてくる。

自宅のアパートへ帰宅する前にATMへ寄つた。

海外にいる父親から送金された、八月分の仕送りを引き出した。

千冬は負債金額を月々の仕送りで割つてみた。一生かかつて返せるかどうか。

束が提示した返済方法を思い出す。

(クリスマス・イヴまでに『白騎士』を乗りこなす)

残り四ヶ月と少し。達成できなければ一生束の下でただ働きだ。

束のことだ。一夏にも負債の影響が及ぶと思い、ぞつとしてしまった。^弟

帰宅したあとも不安に苛まれながら洗い物をする。弟の世話をするうちに眠つてしまつた。

三日後、ゴミ焼却施設が大爆発を起こした。

もともと千冬たちの自治体で使用していた焼却施設は十数年前に閉鎖している。

焼却能力が乏しくダイオキシン発生の可能性が高かつたからだ。

閉鎖後、近隣でもつとも大きな自治体にお金を払い、焼却処理を委託していたのだ。

幸いと言つて良いのだろうか。死者はおらず、軽傷者が出てくらいである。

束と昼食を食べていた千冬はテレビのニュースを偶然目に止めて愕然とした。

またしても爆発。警察は事件性を疑い、捜査を進めるらしい。

食卓が沈黙で支配された。

「ちーちゃん！ またゴミ箱に捨てたね!!」

千冬はゴミを毎週こまめに出す。

大家がゴミ袋を無料配布しているので、余分に持つて帰っている。

束がＩＳコアの数を確かめた朝、普段の習慣で燃えるゴミを出していた。

千冬は飯椀と箸を置いて、口の端のご飯粒を拭いとりながら、よろよろと立ちあがる。硝子に映り込む、顔色を失った自分をしばらく見つめていた。

***** 4

八月二一日、久しぶりに中学校へ行き、剣道場の掃除をする。

胴着を陰干ししていると、富山がふらりと現れ、いかにも挙動不審という様子だ。

富山の郷里は埼玉、千冬は神奈川県民。

Tシャツにハーフパンツという出で立ちの彼女に学校案内を申し出る。

二時間ほど時間を潰して別れた。

軽トラックのエンジン音。

時速は六〇キロと山路にしては高速なので、最高速度の標識は四〇の道では立派な道交法違反になる。

目の前が砂埃だらけだつた。残暑で汗だくなつた千冬が咳き込む。

自宅に帰り、学校の宿題を取りに帰る。

弟を人の良い大家にあずけて篠ノ之神社へ向かう。

長い石段を登つてひと休みしようと足を止めた。

木陰を見つけて腰を下ろし、眼下の街並みを眺めた。

貨車が勢いよく走つて行く。鳩とカラスが飛んでいる。猛禽類が空中を旋回し、間延びした独特的の鳴き声が響いた。

神社に着くと、作務衣に着替えた富山と東が話し込んでいた。

どうやら最寄り駅で配つていた海浜公園のチラシを肴に、あーでもない、こーでもないと相談しているようだ。

「あした、みんなで行けばいいじゃないか。もうすぐ夏休みが終わるんだし、ちょっとぐらう構わないんじやないか？」

千冬が背後に回り込んで言うと、びっくりした東がうろんな目を向けてきた。

「問題があるんだよね」

「問題？　へえ……言つてみろよ」

「ちーちやんだよ。東さんは知つてるよ。君の宿題が終わつてないつてこと」

千冬は弱い声で笑つた。

そう。宿題はまつたくの手つかずだ。

毎年長期休暇の終わりになると、東の宿題を全部写すのが慣例になつてゐる。東が言いたいのは、自分でやれ、という話である。

千冬はいつも通り抗議したが、今回にかぎつて折れてくれない。

そのうち、生瀬と加藤が日傘とパソコンバッグを抱えて現れた。東はふたりにも事情を説明した。

「お前ら、宿題はどうしたんだ。やつてるところなんて見てないぞ」「…………」

生瀬が持っていた伝票を渡す。

郵便小包の領収書だつた。送り主欄に先日ゴミ焼却施設が爆発した街の名前が書かれている。

送り先が違うものの、加藤も似たような伝票を持っていた。

(まさか学校の宿題を持参してくるなんて……)

千冬は考えもしなかつた。

それゆえ、富山たちのすつきりした表情が輝いて見えた。

「キヤリーケースと初日に配った小包……」

「私たちが遊べるかどうかは、ちーちゃんのやる気にかかるんだ」

さらに東は先日書いた念書をちらつかせてきた。どうやら千冬に拒否権はないようだ。

三〇日、千冬は穏やかな水面に光を失つた瞳を向けながら、浜辺までの道のりをぼん

やりと歩いた。

「終わった・終わった・終わった・終わった……」

「さあてインフィニット・ストラトスの水密試験をしようかな。 束さんは夜なべしてこんなものを作つてみました」

千冬は形だけうなずく。

束がゴルフバッグから双胴式のモータージェット船を取りだす。

アンテナマストを固定し、コントローラのバッテリーが満充電になつているか確かめる。

パソコンを起動してGPSとの通信を確認。 生瀬たちへ持参した段ボール箱の梱包を解くように合図を送る。

「今日は短距離ジョウントを試します」

昨日、束は八着目のステツにISコア搭載作業を実施した。

事故防止のためシールドバリアの出力を最大に設定してある。

裏側にパッキンを取り付けた蓋を開けて、ケーブルでパソコンとつなぐ。

束と富山がカスタマイズしたという特製OSISソフトウェアを起動する。「ISS」という名前だ。

富山はしきりに「伽藍とバザールOS」と呼んでいたが、束は無視した。

黒いターミナルにコマンドを打ちこむ。

その横で千冬は、さんさんと輝く砂浜と押し寄せる小波を見つめるうちに、生氣を取り戻す。

足を引っかけないようケーブルをまたぎ、作業にいそしんでいた束を呼ぶ。

「なあ束」

「今、忙しいんだよ」

千冬は無視して続けた。

「例の長距離量子通信を試せばいいじゃないか。パソコンなんていらないんだって束が言っていたろ」

「ISコア間の量子通信はできるけど、インターフェースが作りかけなんだ。
バグつて精神だけジョウントしたら大変だよ。

ちーちゃん。人間の思惟はどこで行われると思つてる？」

千冬は深く考えず頭を指さす。

束は深くうなずき、親指を立てて首のあたりでまっすぐ横に動かした。

インフィニット・ストラトスは別次元に構築した物流システムを利用して物の出し入れを行う。

別次元の物流システムを利用するためには、まずISコアを介して生体情報を記録する。

記録した情報にタグ付けを行い、外から情報を取り出せるようにするのだ。

量子化により物を格納する際、物流システムはタグを読みに行き、最初に記録した状態との差分確認を行う。

このとき損傷が認められると時間軸を巻き戻す。千冬たちの世界では見た目上は治療・修復となる。

「インターフェースが未熟だから頭だけ格納されちゃうんだよ。

シミュレーションしたら頭が消えちゃったのさ。

やつてみて、元に戻そうとするけど肝心の身体がダメになつてる。

頭が消えたら、人は死んじやうでしょ」

「……おい」

砂浜に波打ち音が絶えず立ち続ける。

後ずさりした千冬は地平線の向こうに目をこらした。

タンカーが汽笛を鳴らしている。

リモコンモータージェット船に待機形態へ転じたインフィニット・ストラトスを設置

する。

GPS装置と周波数発信器を取り付け、念入りに防水対策を加える。

船を浅瀬に浮かべ、束はスマートフォンのストラップを首にかけた。

千冬が時計を読み上げる。秒針がゼロになつた。

「モーター始動！」

三〇秒が経過する。

「進路〇三〇、距離二キロメートル、短距離転移開始！」

東がスマートフォンの画面に触ると、船が消失した。

すぐさまパソコンへ駆け戻る。

沖合3Kmの地点に船があるとGPSが知らせてくれた。

ねる。

千冬は、ちょっと信じられない思いで再び地平線を見つめたまま立ちつくした。ふと重要なことを思いだした。

「なあ、どうやって回収するんだ？」

その場の一団が互いに顔を見合させる。みんな往路のことばかり考えて復路のことを見忘れていたのである。

三一日、GPS装置の輝点を確かめる。

ISコアは潮流に乗つて洋上を漂つており、東へ向けて移動しているようだ。

もし漁船が通りかかったとしても小さな船だから見落とす公算が高い。

九月一日、夏休みが終わった。にもかかわらず、六人は帰り仕度をしていない。
自宅から戻つた千冬は心配になつて東に尋ねた。

「彼女たちは戻らないし、帰らないよ」

六人はひたすら湾の方角を見つめていた。

まぎれもなく何かを思いつめた姿である。

「良くないだろう。みんなはみんなの家に帰らなきや」

「それでも彼女たちは帰らない。クリスマス・イヴまで行動を共にするんだよ。そ
ゆー約束を交わしているんだ」

あのときの書類だ。

中身をのぞき込むこともできたはずだが、あのときは興味がなかつた。

書類は母屋のどこかにしまつたはずだ。

そこまで考えて千冬の思考が中断する。

幼児の訪問だ。束は猫なで声で妹をかわいがつてゐる。

束の妹は朝食の用意がととのつたことを知らせに来たのである。

束は織斑姉弟、両親、妹の等くらいにしか心を開かない。

サマー・スクールでは子ども先生として教壇に立つのだが、一時的なことだと割り切つてゐるからできるのだ。

生瀬や富山と仲良くしてゐるのは、彼女たちとの関係が期間限定だと知悉していたからだ。

そして、集めた六人はある種の天才だつた。

生瀬は物理に強く、宇宙・航空工学への理解度は目を見張るものがある。

富山は情報工学への造詣が深い。ISソフトウェアを構成してゐるコードの八割は彼女が書いたものだ。ISコアの制御も指示こそ束だが、実装を担当してゐる。

加藤は動体視力が優れていた。集中すれば何もかもがゆっくり動いてゐるように見えるらしい。

福島出身の伊佐敷は数学。九州から來た島津は化学や織維工学。

千葉から來た加賀は金属と艦船への造詣、両親が建築事務所を営んでゐるおかげで土木・建築についてよく知つてゐる。

束はすべてを網羅するような多才にして天才だが、たつたひとりしかいない。

千冬もまたひとりだった。

「帰りません。帰る必要はもう、ないんです」

最年長である生瀬が他の者たちの心を代弁する。

真剣なまなじりに千冬は気圧されて、後ずさる。

扉を手をかけ、箒の頬をなでた。

「ご飯を食べよーなー。一夏も一緒にだぞ」

今ごろ一夏はお駄賀目当てに境内を掃き掃除しているはずだ。

うん！ と箒は元気よく返事をしてから、千冬に言い含められたとおりに動いた。

二学期の始業式から戻ると、六人は淡々と自分たちの仕事に励んでいた。

束は厳しい先生だった。富山とよく衝突したが、白騎士の能力を洗練させるためにも必要なことであった。

「洗練、で思いだしたんだけどな」

千冬は、加藤から持ち掛けられた提案を皆に説明する。

インフィニット・ストラトスの動きをある程度反射的に行えるようにしたい。

得意のプログラミングで動きを追尾できないか。

「もし私たちの誰かが気を失つたりしたとき、落ちたらまずいだろう」

束が示した安全な着地手順を実行できない。つまり、着地に失敗して死ぬ。

束は提案を受け入れ、千冬と加藤の動きを記録して動作の標準化を進めることになつた。

二日、束のスマートフォンで漂流中のISコアを確かめる。

千冬は実力テストを終えた開放感からか、束にどこかへ遊びに行かないかと持ち掛けた。

夏休みのあいだ計算し続けたおかげで、数学の出来に手応えを感じたからだ。
「ち一ちゃんはたかるつもりなんですよ。その手には乗らないよ」

束は手帳を広げて、近隣の例大祭の日取りを確かめる。

「もうすぐ隣町で例大祭があるね。みんなで行こうよ。まだ暑いから浴衣でいいよね」「待て……私は浴衣なんか持つてない」

「そういうと思って、雪子伯母さんに話を通しています」

束は七月の祭に私服で参加したことを覚えていた。

しきりに悔しがつていたので、裏で何かを企てているとは感じていたが、まさか浴衣を調達してくるとは意外だった。

「お前。祭りは嫌いじゃなかつたのか」

「今年は特別だよんつ」

千冬は剣道部に顔を出し、下級生へ指導してから帰宅した。

三日、学校帰りに篠ノ之神社へ寄ると、雪子が待ち構えていた。雪子は神主とは年の離れた妹である。

東京の芸術大学を出て、近所の染織家宅へ押しかけ内弟子として働いていた。束と容姿が似ていて、見分けがつきにくい。

千冬は背筋が伸びているか、猫背かで見分けている。

雪子にはうわさがある。

東京で大恋愛をしたが、失恋を機に地元へ戻ってきたのだという。

真偽のほどは定かではない。今は染織家の若先生に夢中だ。

先生は教師を辞めて家を継いだのだが、雪子は短い教師生活での教え子だつた。若先生が小遣いをくれる姿を想像してみた。彼と雪子をくつつけたら面白いのではないだろうか。

雪子の後について篠ノ之家の母屋へ上がつた。

「これを見て

と、畳を指す。

そこには一着の和装が広げられていた。

「浴衣ですか。派手すぎやしませんか」

「千冬ちゃん。美少女なんだからたまには遊ばないと男に逃げられちゃうよんつ」

「それは貴方のことでしよう、という声を飲み込んだ。

「男には興味ないです。柳韻先生(りゆういん)みたいな強い男なら考えるかもですが」

雪子が高く笑つた。

「兄貴がっ!? あ、いけない。千冬ちゃん。兄さんみたいなムツツリスケベが好きだなんて趣味悪いわよ」

雪子はしばらく兄をこき下ろしてから、千冬に袖を通すよう求める。

「……こで?」

制服のリボンを解かれて千冬はうろたえた。

「誰も来ないわよ。女同士なんだし、いつも東と一緒にお風呂に入ってるんでしょ。見られても平気・平気」

「それは……」

と言いかけて千冬は目を丸くした。

最近東が作つたという、ウサ耳型 I-S コア探知装置が裸の隙間から覗いている。探知装置には静止画・動画撮影機能も組み込んであつた。

篠ノ之流の奥義を繰り出し、一切音を立てずに裸の傍らに佇む。

そして、一気に開いた。

ちょうど渋る富山に、束が小声で指示を与えている場面だ。

束は驚くあまり舌がもつれた。

「ち、ちーちゃん。これはね。ちーちゃんの成長データをインフィニット・ストラトラストへ反映させるためであつて……」

眼鏡の縁を弄んでいた富山が消えいりそうな声で、バレてますよ、と束に耳打ちした。

* * * 6

九月六日、千冬は制服を剥かれて泣く泣く浴衣を着た。

束がネックレス型に形態変換したISコアを配る。暴発や爆発、生首ジョウントは起
こりえないと太鼓判を押すもののやはり不安が募つた。束が周囲の反対を押し切つて
ISコアをハンマーで殴る。何も起こらなかつたので渋々首にかけた。

祭りに向かう者はみんな浴衣に着替えていた。胸元にはネックレス型ISコア。み
んな少しだけ笑顔がひきつっていた。

その後、いざ出発する直前、雪子が気を利かせて一夏と箒を預かると申し出た。

向かう先は隣り街でもつとも規模が大きい神社だ。天照大神や素戔鳴尊など多数の
神様を祀っている。今日は例大祭であり、屋台が境内を賑わす。臨時で増便されたバス
に乗り、揺られること一五分。野山が姿をひそめ、代わりにコンクリート製の人工建造
物がひしめきあう。五分後にはまた自然が返り咲く。

陽気に響く笛や太鼓の音が近づくにつれ、千冬の心ははやる。

幼い頃、両親に手を引かれてお祭りに出かけたことを思いだす。まだ一夏が生まれていなかつた。特撮ヒーローのお面を後ろに被り、金魚すくいや型抜きをして遊んだ。金魚がはいつた袋を手首にかけていたのに転んでダメにしてしまつた。すぐに両親が拾い集めたが、程なくして金魚は死んでしまつた。家に帰つても泣きやまず、疲れて眠つてしまつたのである。

そのときの父と母の顔を思いだそうとするが、靄がかかつたように曖昧だつた。東が肩に手を置く。

顔をあげたとき、「どまります」と描かれた紫色のボタンが点灯した。

千冬は先頭を切つてバスを降りる。東たちを待つべく門の前で振りかえつた。
フー、と誰かがため息をつく。

小走りに駆けて千冬の隣に並んだ東が素直を感想を口にした。

「腰がくびれてるのにおっぱいがたゆんたゆん。まゆんまゆんさんは男殺しですね」

高校生は違う。富山や加藤らと意見を交わして満場一致でうなずき合つていると、生瀬が頬を林檎のように真っ赤にして反論する。

「肉の塊をぶらさげていてもいいことなんてないですようつ。男の人の視線とか・視線とか・視線とか……」

見ると、富山があからさまに顔をしかめている。

みんなの思いを代弁するかのように束が告げた。

「まゆんまゆんさん。そういうのは贅沢な悩みですよ。帰つたらみんなにどうしたらそんなに育つか秘訣を聞かせてください」

一悶着のあと、千冬は皆をつれて山門をくぐつた。

手水鉢を囲み、束が軍資金を分け与える。千冬は三千円を超える大金を受けとつていた。七を掛けると二万円を超えてしまう。千円札を握りしめて、のほほんとする束を凝視した。

「お金の出所つて……」

千冬はあらぬ想像をして青ざめた。今までも気にしないようにしていたが、研究資金をどうやって稼いでいるのか見当もつかない。だいたい篠ノ之神社からして、神社ひとつでは商売として成り立っていない。神主が副業で不動産業を生業としているからこそ暮らしていくのだ。

まさか……、と千冬は頭を抱えた。一度考え始めたらもう止まらない。

子どもをつれて家族サービスに励むお父さんたちが裏でこつそり中学生を買つているのではないか。束は実は女衒として女の子を斡旋しているのでは……。たとえば生瀬や加藤のような少女たち。

「千冬さん。えっちなことを想像してません……？」

生瀬が肘で小突いた。

千冬は束の衣装ダンスを開けたことがある。様々なコスプレ衣装が揃つており、誰かに着せるつもりなのか明らかに彼女のサイズではない男装も混ざっていた。

「……そんなことはないぞ？」

「ですよね」

心にもない笑みを貼り付ける。彼女たちにしてみれば、軍資金が手にはいつただけ僥倖だった。

が、一行は時を置かずして、束が投資した理由を知ることになる。

さつそく射的の前で足を止める。六人をゆつくり顧みてから加藤の手をとる。ポケットから五〇〇円玉を中年の店主に渡し、何度も加藤の腕を引っぱつて「あのゲームソフトが欲しい」と懇願した。

加藤の実家は裕福で、父親は趣味と実益を兼ねて冬場は猟を営んでいるそうだ。父親は好奇心旺盛な加藤を趣味に付き添わせ、狩りの鉄則を学ばせた。加藤はライフル銃の扱いに長けており、銃器に詳しかったのである。

コルク銃を手にしたとき、加藤の目つきが変わつた。

「本業にやらせるのは反則じや」

千冬のつぶやきもむなしく、束はたつた五〇〇円で税抜き七九八〇円相当の

ゲームソフトを入手してしまった。

(しめしめ。うまくいったぞ)

しばらくして、東の心の声が聞こえてきた。幻聴だと無視していたが、背後のふたりが確かめ合っていた。

千冬は東に追いつき、焼きアイスを指さした。

(えーっ、ちーちゃん趣味悪いなあ。 東さんは今、アイスより揚げ餅が食べたいんだ)

続いて隣の揚げ餅屋の屋台を指さす。

(おつと……ちーちゃんも私の好みがわかつてきたみたいだね。 感心・感心♪)

様々な屋台を指し示すたびに心の声が響いてくる。

最後に千冬が自分を指さした。

(どういうことなのかなあ。 もしかしてちーちゃんは東さんに食べて欲しいってことかなあ……えつ!? ど、どうすればいいのかな。 とりあえず境内裏に連れ込んであれやこれや……)

東が激しく動搖している。まごまごしているすきに彼女をとり囮んだ。

「お前、私を食べたいって思つてるだろ」

「ええ!? そ、そんなことないじやないか。 東さんは恋愛には興味ないのだ」

「境内裏であれやこれや……とはどんなことか、ここで言つてみろ」

「い、言えるわけないじゃないか！」

内心を見透かされたことにうろたえながら、東がひとりで揚げ餅の屋台に向かう。三つ買い、一〇〇〇円を支払って釣り銭を受けとる。醤油が唇を汚すのも構わず一口で頬張り、ふたつを皆に差し出した。

おごりだという。

話題を逸らそうとアメリカンドッグの屋台に向かい、同じように三つ買って戻ってきた。一本を頬張り、一瞬で嚥下する。ふたつを千冬に手渡した。

アメリカンドッグを見て、マスタード派とケチャップ派で互いに牽制し合う。千冬はケチャップ派だ。こんがり焼いたソーセージを狙う獣たちが屋台の前で冷戦を繰り広げた。

東が田楽豆腐を買つてきた。三本買つて一本はペロリと平らげた。味噌がたっぷりかかっている。みんなは興味を示さず、雪国出身の加藤が残りを引き取つた。

(これ美味しいんだけどなあ)

いそいそと焼きそばを買いに行く。東をながめていた千冬がある重大なことに気がついた。

「あいつ、どんだけ食べるつもりなんだ……？」

おそらく数万円は持参しているはずだ。屋台の前に立つては一〇〇〇円札を出して

いる。食欲旺盛な加藤がくつづいており、おこぼれに預かる算段なのだろう。
心の声に耳を澄ます。

(まゆんまゆんはたゆんたゆん。おつきくなつたらちーちゃんもたゆんたゆん)
束は知られていると承知で歌を唱えていた。

(ついでに束さんもたゆんたゆん)

あいつ……、と千冬は拳を握りしめて顔を上げた。

もうすぐ七時になろうとしていた。千冬は六人をつれて本殿へ続く石段を登る。

遅れて、束が下腹をさすりながら追つてくる。ほっぺを膨らませては、千冬に速度を緩めるよう抗議した。

「食べ過ぎるからだ。自制・自制・自制、束に足りないことだ」

とがめながら優越感に浸る。スピーカーから運営のお知らせが聞こえた数分後、花火が夜空に昇り、パツと花咲いて余韻を残す。

一発、二発――。

本殿を目指していた千冬たちは足を止めて、ため息をもらした。

二〇時過ぎ、雪子から連絡を受ける。

「一夏くんと箒ちゃんが疲れて寝ちゃつた。今、母屋で寝かせてるから千冬ちゃんも一晩泊まつていきなよ」

帰りのバスを降りて神社へ戻ると、果たして一夏が箒に寄り添つて床に就いていた。神主の妻君と雪子に礼を告げ、千冬も離れに泊まると言い添える。

帯を解き、雪子から寝間着を受けとる。

千冬はネックレスを外し、ためらいがちに段ボール箱へ戻した。

箒ちゃん・いつくん・箒ちゃん・いつくん……。幼児の寝姿を目にして以来ずっと聞こえていた心の声が絶え、軒天をぐるりと見まわしてから東を探す。

蚊の侵入を恐れて勝手口の錠をかつた。しばらく空模様を眺めていると、遠く、行き交う貨車の車輪とレールがこすれ合つて空を震わせた。

しばらくしてから母屋の燈が消えた。薄闇のなかで白々と瞬く星々に見とれている

と、向かいの小山から、ゴウン・ゴウン・ゴウン、と鐘が鳴る。

千冬は湯浴みをすべく、団扇うちわを扇ぎながら浴場へ向かつた。バブル時代、神主の父が土地転がしで一儲けしたあと、サマー・スクールの生徒たちのためにしつらえたのだ。いくぶん古びてはいるが、近隣の尽力により手入れを欠いたことがなかつた。

脱衣所は石けんの香りを匂いたつ。真ん中の籠には見覚えるのある下着が無造作に放り込まれている。純白のコットン地。籠を整えながら、タグを盗み見る。隣の籠も。(……大きいな)

千冬は、束の緩みきつた表情かおを考えた。束にしてはめずらしくはしゃいでいた。屋台を総なめするなど初めてのことであつた。いつもは千冬の背に隠れて三〇分ほど滞在し、境内裏に腰かけてひつそりと花火を観て終わる。

(特別? 特別とはどんな意味なのだろう)

他人に冷たくして、寄せ付けないようにする彼女。他人を目にしては愚かだと侮り、馬鹿だとさげすむ。教室では浮いた存在でもある。彼女の見た目の美しさに惑わされて、愛と情欲を混ぜ合わせた思いをぶつける少年たちがいる。無知・無念・無残……。

電球の灯火が千冬の裸体を仄かに彩る。

「いやあ、遅かつたね。束さんは待ちわびちゃつたよ」

長髪をアップにした彼女は、浴槽の真ん中を陣取つて顔だけ後ろへ振り向ける。桶に

湯を溜めて一浴びし、髪と身体をサツと洗う。

沐浴は手早く済ませるのが千冬の信条だ。加藤と島津、続いて伊佐敷、加賀が脱衣場へ消える。富山は浴場の隅で念入りにストレッチしている。

指を折つて残つた面子を確かめる。東、富山、生瀬。

(あれ?)

生瀬の姿が見えない。風呂上がりにたゆんたゆんの秘訣を聞き出すのだろうか? 或いは東が口にしたとおり一足遅かつたのか。

「どみー。生瀬の居場所を知つてゐるか? 母屋で別れてから姿を目にしていないんだ」

富山が顎をしゃくる。風呂だ。

礼を言い、湯船につま先を浸す。と、そこへ微かに漏れた艶めかしい声音。

「靈」

千冬がいぶかつたのは、篠ノ之神社には旧い言い伝えがあるからだ。

江戸後期、神主の祖先である篠ノ之なにがし某には女むすめがいた。

篠ノ之某は旅籠を営んでおり、多くの使用人が働いていた。弥兵衛なる男がおり、女と恋仲になつた。

篠ノ之某は別の男と婚儀を図るため女と弥兵衛の仲を引き裂く。

弥兵衛は逐電。

一年後、旅籠に届けられた文には弥兵衛がべつの女と夫婦となつたことが書かれていた。

弥兵衛を忘れることができない女は失意のあまり、旅賃代わりに預かつていて脇差しで喉を突き自害。

女の鮮血が激しく飛び散り、柱や襖にかかつた。それ以来、どれほど淨めても決して血の痕が消えなかつた。

篠ノ之神社には大正九年頃まで、旅籠の建物がそのまま残つていた。

関東大震災の予震で傷んでいた建物の一部が倒壊したため、取り壊しとなつている。

自害に用いた脇差しや旧い柱は神社に奉納し、今でも蔵に大切に保管されていた。

そして女が自らを殺めた現場というのが、ちょうど千冬たちが湯浴みしている浴場であつた。

「……ううう……」

幼い時分から言い伝えを聞かされて育つた。

集落のなかには旅籠の使用人の子孫がいる。すでに八十代後半へとさしかかつており、健康を害して伏せりがちだ。

実父は震災まで、ちょうど旅籠で働いており、むすめ女の居間で何者かの声を耳にする、と

いつた奇妙な体験をしている。

「ほら、あそこ」

富山に肩をたたかれ、鳥肌を立てる。

示す先には束がいて、生瀬が華奢な肩肘を震わせ、顔を俯かせていた。

「靈なんていないのでよ。奇妙な声は、ほら、肌を触れられて慣れぬ刺激に脳が反応している。篠ノ之束さんは生瀬真裕なる人物が生きた証を直接触れて確かめていたにすぎません」

束はとがめられると察して、無邪気な笑みを浮かべたまま手早く用を済ませる。

残されたのは息も絶え絶えといった風情の生瀬だ。富山は身体を湯へ浸したあと、再びストレッヂを始めた。

生瀬を気づかうつもりでいたが、びくつとされては何もできない。心配するうちに、ついうとうとしてしまった。

「風呂場で眠ると死にますよ」

富山に呼ばれ、風呂からあがる。生瀬の姿は消えており、使用済みの脱衣籠が積まっていた。

髪を乾かしてから富山と一緒に寝所へ向かう。横になつていた束の言い分はこうだ。

「ちーちゃんはのんびりさんだね。さては寝てたでしょ。大きないびきをかいてたんじゃないかな。
とみーさん。こんなんじやあ、むすめさんの靈はよそへ行つてしまつたんじやあります
せんか?」

富山? 千冬は傍らにいたはずの富山透を見やる。

富山は蚊取り線香を焚いて縁側に腰かけていた。突然合掌して目を伏せたので、千冬
は驚いて顔をこわばらせた。

「大丈夫です。ほら、季節外れの蛍が一匹、つうーー、と」

千冬たちの地域では蛍は六月から七月にかけて観ることができる。

今は九月だ。見慣れた色よりも淡く、売り物の蛍が逃げ出したのではなかろうか。千
冬は弱々しい光跡を追つた。

一分弱のあいだ、母屋の軒で燈が点る。目を離した隙に蛍を見失つてしまつた。

「蛍は、行つたのか」

「ええ、先ほど逝きました」

富山が手を合わせて祈る。

千冬は横になつて掛け布団のなかに潜りこんだ。

瞼の裏では、先ほどの蛍が河へたどりつき、まばゆいばかりの光へと迎え入れられる

光景が広がつていた。

＊＊＊8

九月七日、早朝。

朝五時半に目を醒まし、道場をぞうきんがけする。朝食まで時間があり、珍しく雪子が道場を訪れた。

「兄貴の内弟子に稽古つけたげる」

得物を覗て、千冬は青い顔で立ち止まつた。

槍術の稽古で使う棒だ。長刀の演舞を知つていたけれど、槍術を仕込まれてゐるとは意外であつた。

雪子は束と同じ背格好だが、身の引き締まり具合が全く異なつてゐる。

日々の染色作業は重労働である。神主の骨が透けそうなほど白い手脚を受け継いでいる。切つ先は力強く、闘志がみなぎつてゐる。

薄茶のリボンで癖のない長い髪を縛り、パリツと糊が利いた道着、藍色の袴。薄桃色の唇が健康的な若々しさを保つてゐる。

「雪子さんがそう云うなら」

木刀を下ろす。竹刀を出しても良かつたが、雪子の腕前ならば万が一はあり得ない。
「喉への突きは禁止でお願ひします」

槍相手に剣は不利だ。千冬は制限を加える。
相対して礼。構えて動く。

(どう動こうか)

槍の間合いで戦り合えば勝ち目はない。ならば肉薄する以外に手はなく、選択肢がない今、雪子の圧倒的な有利は搖るがない。

残暑が身にしみる。開け放つた格子窓の隙間から風になびいた木の葉が舞い落ちる。
ふたりの間をひらひらと降りて、床に落ちた。
影が動く。

一・零・停止。

つま先に加え、槍の切つ先が動線を追尾した。雪子の瞳には濃い影がくつきりと映つ
ている。

雪子の動作は緩慢だ。都會暮らしで勘が鈍つたか。いける、と千冬は勝利を確信す
る。
が、棒がゆるやかにうねつて、「イイイイイイヤアアアア！」と激しい気合いが道場に

響く。

千冬はのけぞつて、コン、と鳩尾を叩かれた。

「はい。死んだ」

木刀が手から滑り落ちる。

「私に勝てるつて思っちゃつたろ。気をつけないとダメだぞー」

雪子が棒を引いてようやく息がつけた。

「まだ時間があるよ。千冬ちゃん、シャワー浴びてつていいよん」

二、三歩、後ずさつた。言われて衣服を確かめると、ぐつしょり濡れて気持ち悪い。

千冬は道場を辞して好意に甘えることにした。

八日、学校に紺色のパンツスーツを着た女性が現れる。

束と面会し、インフィニット・ストラatosへの出資を申し出る。

名刺には「更識紺」とある。

「……なんて読むんだ？」

束がゆっくりとうなずきかけて、目を白黒させた。千冬の指から名刺を抜き取つた。

「さらしきこんさん」

「さら……どこまで名字なのか、どこから名前なのかよくわからんな」
背の高い人の人だったよ、と束がつけ加える。

「へえ……」

研究資金の出所なのだろう。千冬は詳しい話を求めたが、「聞いても理解できないでしょ」と告げられて納得してしまった。

一〇日になると、束の元へまたしても海外から小包が届いた。

今度の差出人は仏デュノア社。米アームストロング社。イスラエルM-I社、台湾の新秋社などと多岐にわたる。

みんなで段ボール箱を開梱する。布きれが出てきた。よく見ると服のような形をしている。

「今度は水着でも仕入れたのか」

かなり……股の切れ込みが激しい。

身に着けるには勇気のいるデザインが多く、中にはウェットスーツみたいなものもあるにはあつた。

「違うんだよ一つ。この水着みたいのを着てインフィニット・ストラトスを操縦すると追従性がものすごく良くなるんだ。この前ちーちゃんとみゆーちゃんが言ってたでしょ。ちよつと反応が遅れるって」確かに覚えがあつた。束が続ける。

「それには、ジャージとかTシャツにハーフパンツで操縦するのは、なんだかかっこわるいんだもん」

千冬は生返事を返したが、内心嫌な予感がしていた。

束のことだから露出が多いデザインを好むに違いない。

ビッグデータだと称して毎日スリーサイズや身長・体重を記録している。

そりやあ、きめ細かいデータ蓄積が性能を押し上げると理解はしていたが、やはり納

得がいかない。

案の定、束は太腿の切れ込みがきわどい水着を選んで持ってきた。

「デュノア社の試作スーツなんだけど、ちーちゃん、着てみてくんないかな」

駄々をこねると雪子を引つ張りだしてきそうなので、おとなしく身に着ける。

インフィニット・ストラトスを借りて外に出ようとしたが、扉の傍から半身を出す等に気づく。

「じ——つ」

「そんなに視ても穴はあかないぞ」

束も幼児と同じことをしてきた。生瀬と富山に目配せして束を連行してもらう。

膝をついて円らな瞳をのぞきこむ。

Tシャツにミニスカートという出で立ちの幼児は、千冬の前に立つて両手を前に伸ば

した。

エイヤ、エイヤ、とかけ声がした。

幼児の掌は弾力に満ちている。千冬の発展途上の頂きを絶妙なタイミングで刺激し、緩急をつけながらこね回す。未知なる感覚に途惑い、ためらいを覚えながらもなげなしの理性を働かせた。

「あんつ、ほ、箒……ううんつ……くつ……いたずらは、よ、せ」

「こーするどちふゆおねえちゃんがよろこぶつて、おねえちゃんがいつてたんだもん。えいやあえいやあ」

「ら、め、んんううううう……」

千冬は指の付け根を噛んで自制しようとした。が、箒の動きは天性のものとしか考えられない。

(このままやられたらつ……おかしくなるつ……)

千冬の膝が抜けた。幼児は全身を使って一生懸命手を動かし続ける。

(日ごろの鍛錬があつ……いかんつ……どうすればいい? どうすれば……)

幼児を傷つけずに納得させる説明を考えた。箒の手を下ろさせ、ゆっくりと諭した。

「本人がいいつて言うまで、こういつたことはよそう……。東お姉ちゃんにもきちんと注意しておくからな」

「そうなの？」

「そうだ。おっぱいを揉むつてことはさ。女の子にとつて、すごく恥ずかしいことなんだ。どうしてか、お母さんに聞くといい。きちんと教えてくれるよ」

「そーなんだー。ありがとうっ！　ちふゆおねーちゃんっ！」

小さな影が母屋へと消えるのを見届けてから、ゆっくりとした足取りで引き返す。拳を握りしめ、掌と手首の調子を確かめてから引き戸を開けた。

束が色青ざめて悄然と立つ様を観察してから、一音ずつはつきり聞こえるように声を発した。

「おい。束、言わなくともわかってるな？」

「ち、ちーちやあん……」

涙目になつてすがりつく束を正座させて、無邪気な妹に誤った知識を植え付けるものではないと、鬼気迫る表情^{かお}で説教した。

十一日、千冬は篠ノ之道場へ向かう途中だつた。
自宅での用事を済ませてから山を目指して歩き、石段を登つていけば自然にたどりつく。

中程まで来たとき、以前学校でみかけたパンツスーツの女の背中が目に入つた。

(あー……東が言つてたな。さらさらさらしきうこんさん？ ま、いいや)

パンツスーツの彼女は汗を拭い、うんざりした顔で鳥居を睨んでいた。

(素通りはしないほうがいいかもな。東のスポンサー的に)

千冬は先日の祭りで三千円以上受けとつたことを思いだした。金銭感覚に疎い東ではあるが、大金をあつさりと寄越す人物がいるからできることなのだ。

「こんなにちは。あのー、神社へ参拝される方ですか？ よかつたら荷物を持ちましょ
うか」
にこやかに申し出る。

長い石段を登る人物がほかに現れるかどうか妖しい。女はしばらく逡巡してから、千

冬に荷物を差し出した。

「重いですよ」

女は申し訳なさそうに告げた。

荷物を受けとつた瞬間、腕が石段へと引っぱられた。高比重の金属でも持参しているのか、ずつしりと重い。

千冬は踏ん張りながら腰を使って抱え込む。後ろに倒れたら真っ逆さまだ……と嫌な想像をしてしまった。

「こ、これ……いつたい、中に、何が……」

二〇キロ、いや三〇キロはあるのではないか。女性は無意味な微笑みを浮かべる。

彼女は無言でゆっくりと昇り始めた。置いて行かれると困るので、千冬はがんばつて足を動かした。

(重い……重いぞ……腕がもげる……)

だれでもいいから代わってくれ。千冬は歯を食いしばって石段を登り切つた。ゼエゼエと息を吐き、瞳を閉じる。

呼吸を整えて、力が抜け掛けた膝に活を入れた。

戦場で歩みを止めることは即ち死を招く。死ぬとは大げさだが、足の甲に落としたら粉碎骨折は免れない。

千冬は切り株を探した。先日、神主が五右衛門風呂を思い立ち、薪を割つた切り株が残つてゐるはずだつた。白く眩しい陽を避けるように木陰へ逃げこむ。荷物を置いて座り込んだ。汗がどつと噴き出す。肘が震えている。もう一度持ち上げるのは難しいだろう。

「あ、ありがとうございます」

女が手巾で汗をぬぐい取る。疲労で頭痛がしたので、しばらくそよ風に身を任せる。と、下の方から聞き慣れた声がした。

「……ああん」

「何の音?」

女が訊ねる。

「……いいぢやああん……」

千冬は流し目を送るのがやつとだ。

「ちいいぢやああんつ……ちーぢやああんつ」

東仕様にデコつた軽快車が石段から颯爽と飛び出した。

砂塵を舞上げながら、前輪から着地する。今朝、神主が丹精込めて整備した砂利道を盛大に荒らし、後輪ドリフトで勢いを殺した。

「ちーぢやん。ひどいよ。私をほうつて先に行つちやうなんてさ。なんだい。おとなの

女人の人といぢやいぢやしちやつてサ。東さんはジエラシーでメラメラしてゐるんだよんっ」

中学三年生にもなつて駄菓子屋で道草を食つてゐるからだ。

東仕様のデコチャリが駐まつていたら無視するに決まつてゐる。

「おい、東」

「なんなのさ」

東がデコチャリのスタンドを立てる。

音に気づいた神主が飛び出してきて、荒らされた砂利道を目にするや真つ青になつた。

千冬は親不孝者の惣領娘に、神主の心の叫びを聞かせてやりたかつた。

「どうやつてデコチャリで階段を上つたんだ」

「もちろんこいできたに決まつてるじやないか」

あつさりと言う。

だが、答えになつていないので質問を繰り返す。

「しかたないなあ。ぶんぶん。タネを教えてあげるから、ちーちゃんちよつと後ろ向いて」

汗ばんだ背中を向ける。

上着に白のブラウスを選んだのは間違いだつたのかもしれない。濡れてストラップが浮きあがつてゐるはずだ。

束は何もしないつもりか、無言を貫いてゐる。

吹き抜ける風に枝葉がざわめく。大きな入道雲がひとつ、ぽつんと浮かんでいた。

風の抜け道が手に取るようにわかつた。木陰から虫が這い出す様子、花びらがこぼれるように咲いてゐる。

束の影が揺らめき、めまいとくすぐつたさを覚えた。

「……んんんっ……」

触れるか触れないくらいの場所で、すうー、と指先が流れる。ゾクゾクとした感触に全身を貫かれて、力が抜けてしまつた。

(身体に血が、熱が広がつていく……)

「いーよー。こつち向いてよ、ちーちゃん」

束はスカートのまま座禅を組み、真昼にもかかわらず背中から白い後光が差してい
る。

「教祖さまである。みんなのひれふすがいー」

何をやつてゐるんだ、という声をのみこむ。

束は空中浮遊をしていたのだ。

「ＩＳを使つたな……？」

ＩＳとはインフィニット・ストラトラスの頭文字を組み合わせた言葉だ。

「インフィニット・ストラトラスの部分展開、っていう技術だよ。ちょうど辛子大根さんがいるから見せてあげようと思ったんだ」

（辛子大根？ そんなベンネームの人、いたっけか）

「更識、紺ですが」

教祖さまごつこを止めた束にむかって、女が名刺を差し出す。

「ほい。ちーちゃんには前にも見せたけど、もういつかい」

今更だが、名刺には「倉持技研 担当役員」とある。

「その若さで役員……」

束が耳打ちした。

倉持技研は国家プロジェクトの受注を確実なものにするため、天下りを受け入れたのだという。

更識一族は財界に大巾圧力を加える力を持つており、目の前の女は発言権の強い血筋だった。

「ところで楯無さんはお元気ですか？」

「……楯無をご存じで」

女の目つきが変わった。

束の出方を窺おうと、あからさまに警戒している。

どうやら束は更識家ゆかりの者でなければ知り得ない情報をつかんでいるようだ。ふたりのやりとりを聞きながら、ぼんやりと更識家は甲府にゆかりのある一族ではないかと邪推する。

「暑い中ひ」くろーさまです。母屋に寄つていつてください。

父に冷たい飲み物を用意させますよ」

束が更識紺の手を取り、母屋へ一緒に歩いていった。

＊＊＊10

九月一四日、束が作ったという昆布の和え物をみんなで食べた。束には料理の才能がない、と千冬が険しい顔つきで断じた。

*

一五日、ひさしぶりに船のGPSを確かめる。ハワイに向かってドンブラコ……にしては速すぎる。束に頼んで調べてもらつた。どうやら夜なべで造つた船が壊れてISコアだけが船底部のフジツボか何かに引っかかっているようだ。

「コア・ネットワークとやらでどの船か調べられないか」

「そういうだろうと思って、まゆんまゆんに調べてもらいました。アメリカ合衆国海軍籍の船つて言つてたかなあ」

それ、まずいんじやないか。千冬の顔が青白くなつた。

「強い衝撃を与えると大丈夫。船の底でしょ？ 座礁したり浅瀬でこすつたりしなければ大丈夫。軍人さんはプロ集団の集まりだよ？ そんな真似するわけない

「じゃないか」

「まさかつてことがあるだろう。プロだつて人なんだぞ？」

「心配しすぎだぞ、ちーちゃん♪」

東はあつけらかんとした態度だ。すぐ早弁に心を奪われて、それ以上追求することはできなくなつた。

一七日、今日から連休だ。東と一緒に横浜へ出向く。中華街で肉の入つた饅頭をごちそうしてもらい、お土産も買つた。東の財布をこつそり見ると、カードしか入つていない。鉄道系ICカードで勘定を済ませていたのだ。

「で、どこに連れていくんだ？」

信号を待つていた東は地図を見ながら、元町を目指していた。目的地は横浜の産業貿易センター。旅券の手続きをするためだが、千冬にはパスポートの取得手続きをする理由がない。海外には出たことはない。これから出る予定もなかつた。

東が勝手に手続きを進めており、わけがわからぬままパスポートが発行されることになつていた。

「それからちーちゃん。私たち、来月から諸国漫遊することになつたから。ほい、eチケット」

「いやいや聞いてない。一度もそんな話をしてないぞっ！」

「いやあ引かれると思って話しそびれちゃつた。ごめんねツ」

お金の出所は辛子大根さんだとか。千冬にがろうじて聞き取れたのはそれくらいだつた。

留学つて……えええつ。冷静になればなるほど千冬が同行しなければならないのか疑問が募る。

彼女にはもうひとつ懸念があつた。

「一夏をどうしよう」

「それなら簡単だよ。神社で預かります。箒ちゃんとひとつ屋根の下で暮らすんだよ。ついでに婚約でもしちやう？」

くふふ、と束は妙な笑い声をあげた。

*

二〇日、火曜日の朝。

三連休は部活の練習とISの訓練で終わつてしまつた。昨日の帰りがけ、生瀬に頼んで束に包丁を持たせるなど懇願した。束はISスーツの耐刃性能の測定するんだ、と唐突に告げて万能包丁を携えて飛びこんできたのだ。ヤクザ映画にありそうな身体ごと

飛びこむあの姿勢だ。死ぬ、と思つたが躰が動いた。束は受け身に失敗し、背中を強く打ち付けた。今朝、筋肉痛で動けなくなり学校を休んだのである。

足を引つぱるヤツがない。千冬は一心にトラックを走り続ける。昼休み。職員室に呼び出された。担任のアマノ——三五歳・未婚・女——が書類を持つて不安げにじろじろ見てきた。失礼な。千冬は思った。

「留学の件だけど……」

口元を覆い隠して声を落とす。千冬自身も困惑していたが、アマノも同じだった。

だが、アマノの懸念は別のところにあつたようだ。

「……主力がいなくなるのは、ちょっとどう思つてる?」

「そう言われても、篠ノ之についていくようなものですから……それに受験」

アマノが鉛筆を口にくわえた。動搖すると筆記具の頭を噛む癖があり、鉛筆には歯形がついている。かじつたような痕があり、なるほど確かに千冬がいなくなるのは部にとつて痛手だ。

「主将がどうにかしてくれますよ」

主将は今の二年生だ。一年年下の後輩で篠ノ之道場門下生もある。中学一年生で目録を取得したくらいだから技の切れは素晴らしい。が、ちょっと精神面が弱いのが玉に瑕。

誤解を受けやすい立ち居振る舞いと外見から県内の中学では「皇帝」とも言われている。本来は「豆腐メンタルの皇帝」だったはずで、あだ名が一人歩きしてしまったのだ。「主将が実力を出し切れば全国優勝も夢じやないですよ。……実力を出せれば、ですが」アマノがこめかみに手をあてて訝つた。千冬も同じ気持ちだった。

*

二一日、今日も東は休みだ。一限目は数学である。迷惑な天才がいないので先生の声が明らかに弾んでいる。

何しろ東は授業を無視して内職に励んでいた。一度は注意をしてみたが東に面子を潰されたことがあったのだ。確かに大学院後期課程で扱うような問題だと呴いていたと思う。

昼休みになつてクラスメイトに囲まれた。

「り、留学するつて聞いたけど」

「一月になつたら帰つてくるぞ」

「聞いてない!!」

セーラー服を身に着けた皇帝が悲痛な声をあげる。お前、二年生だろ。階が違うぞ。

という声をのみこむ。

男子が皇帝に路を譲った。ヅカの男役に多そうな顔立ちなので近寄りがたいと見た。
(……ん?)

なんだか女子の目線もおかしい。剣道場にときどき舞い降りる雰囲気でもあつた。
千冬は嘆息してから話を続けた。

「主将が頑張らなくてどうする。私が言うのもアレだが、お前の腕なら全中制覇も夢
じゃないんだぞ」

千冬が率いた剣道部はこれまで何度も全国優勝を果たしている。篠ノ之雪子らそう
そうたる顔ぶれが第一次黄金期を牽引した。しばらく冬の時代が続き、千冬が入学して
から第二次黄金期が始まった。

ちなみに千冬の師・柳韻は私立中学出身である。当時、剣道部には所属しなかつたと
いう。

予鈴が鳴りはじめ、皇帝が自分の教室へ引き下がる。

授業が終わつたので剣道場へ顔を出す。主将を譲る際、引き継ぎを終えていたのだ
が、皇帝の練習相手がいなくなるのでずつとつき合つていたのだ。
「……なぜいる。加藤」

一足早く胴衣を着用した皇帝が駆け寄つて説明した。

「他校の生徒なんですが、練習風景を見学したいそうです。……断る理由がなかったので、いけませんでしたか？」

「いや、いい。よく対応してくれた。ありがとう」

加藤に見とれていた男子部員を皇帝が叱咤する。

時間を区切つて練習にいそしむ。千冬は制服姿の加藤に訊ねた。

「剣道の経験は？」

加藤はロツカーカーから小太刀を見つけて弄ぶ。意味ありげに笑つて指先を曲げて挑発してきた。

「小野派一刀流、皆伝」

「加藤は道産子だつたな」

上段に小太刀。演武の動きだ。所作の良さを知つてはいたが、やはり経験者だつたか。千冬は満足げにうなずいた。

篠ノ之神社に加藤を送るつもりでいたら皇帝がついてきた。
加藤と並ぶとお姫様と騎士を見ている気分だ。

「加藤さんは先輩とどんな関係なんですか」

直球だ。千冬は心のなかで頭を抱える。皇帝には一本気なところがあつてしましばしばトラブルに発展する。

「彼女は神社に居候しているんだ。東の研究を手伝つてゐるんだ」
お前と私よりも遙かに勉強ができるぞ、とささやく。

勉強ができると聞いて皇帝が色をなくす。柳韻は文武両道を尊ぶよう口酸つぱく言
い聞かせていたが、皇帝も千冬と同じく武事に才を發揮するタイプだつた。

「決して親密な仲ではないのですね？」

「んなわけないだろう。昨日今日会つた仲だぞ。何度か風呂と床を共にしたくらいだが
……」

「もうそんなことにつ。好い仲ではありませんかっ!!」

「そうか？」

「そう見えますが」

加藤に聞くと、「それなりに仲いいよね」との返事だつた。

「……信じてたのに」

急に元気をなくし、早足になつていつの間にか走りだした。

「お幸せに！」

皇帝が去り際に言い残した。加藤と顔を見合わせてため息をついた。

「……かばんを忘れてる」

皇帝は大層な粗忽者でもあつた。

*

二四日。名目上語学留学なのだが、一向に準備する素振りを見せない千冬のために勉強会が開催された。

「アイアムアペン」

千冬は鉛筆を指さして自信たっぷりに告げた。

「エアヘッド・ユーだよ。ちーちゃん」

千冬は首をかしげた。英語など使わなくとも生きていけるのだ。自信満々に言いはなつと、生瀬がよくわからない言葉で話しかけてきた。
アメリカ発音なので全く聞き取れない。

「日本語で話してくれ」

しまいには身振り手振りと勢いだけで意思疎通を行つた。

東が腕を組んで生瀬たちに言う。

「やつぱりもつと早くに言つておけばよかつた」

言外に馬鹿だと言つたようだ。千冬は東に飛びかかってキヤツトファイトに明け暮

れた。

*

二五日、皇帝が女子一同をまきこんで送別会を催した。

生瀬たちを見て、皆はうつむき「ハーレムだ」「ハーレムに違ひない」「信じてたのに千冬お姉様」と不穏な発言ばかり飛び交った。

束と一緒にいたときは妙な発言を耳にしたことがない。おおかた束の人望が地に落ちていたせいだ。

意外だつたのは伊佐敷とのツーショットを望むもののが多かつたことだろうか。

あまり話をしたことがなかつたのだが、実は笑顔が素敵なのだ。髪の毛サラサラな爽やか女子に心臓を射貫かれた生徒がとても多かつた。オードブルの用意など裏方に回つっていた雪子と彼女の知り合いに至つては「束ちゃんから乗り換えたら?」などと千冬をそそのかす始末。

「束とは腐れ縁なんだ。乗り換えるも何もできないだろう」

「あー、そつか」

「私と束の仲を疑うんですか」

「いやあ？ そんなことはないよ？ うん」と雪子。

お姉様方の視線が痛い。

会場に戻ると、全員とハグすることになった。皇帝ら各部活の主力を占めていた生徒たちが感激した挙げ句、錦の旗を持ち帰ると豪語した。

*

翌、二六日。授業後、一夏を篠ノ之神社に預かつてもらうための準備をしていたとき、突然東から電話がかかってきた。

「ドッカーン!!」

千冬はあまりの大声に顔をしかめた。

耳鳴りが治まってから受話器を耳に当てる。

「ドッカーン！ ドッカーン！ ちーちゃん、テレビつけて！ 早く」

「はいはい。言うとおりにするよ」

ブラウン管テレビの電源を入れる。地上波デジタル放送に完全移行してしまったため、取り付けたアナデジ変換器がコイル鳴きする。電気屋のスキンヘッドでひげ面親父の笑顔が浮かんだが、すぐさま頭から振り払い、東が指定した局へ切り替える。

「は？ え、 ちよつ」

映像を見たとき千冬は特撮映像か何かだと思った。

早朝のハワイが映っている。映像の中には軍港もチラつと映っていた。ニュースキャスターの解説が聞こえる。

五・四・三・二・一……。

「ドカーン、 だよ。 ちーちゃん」

ハワイに碇泊中だった太平洋艦隊の軍艦が突如爆発、 炎上、 沈没してしまった。 さながら陸奥爆沈であろうか。

「……」

千冬は最初の I S コア爆発事件を思いだした。 一キロ四方が突如爆発したのだ。

今回の爆発で多くの艦船が被害に遭っている。 規模は不明だが、 相当数の行方不明者がいるようだ。

過激派系のニュースサイトは軍港に潜入した戦闘員がテロを実行したと報道。 事実上の犯行声明という見方が強い。

だが、 軍港では不審人物を見かけたとは報じられていない。 元自衛隊の専門家によれば爆発の映像から爆弾が船底部で爆発したのではないとの仮説を述べていた。